

あきらめることはいつでもできる、続けることは今しかできない。続けるからこそ、見えなかったものが見えてくる。

No.365

# 倉文協だより

2019. 12. 15

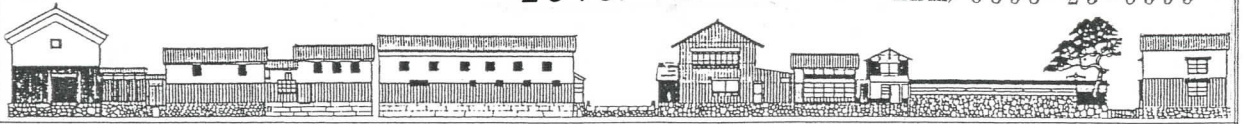
倉吉文化団体協議会「倉文協だより」

編集部主幹 計羽孝之

事務局/[#682-0817]倉吉市住吉町77-1

リフレプラザ倉吉

☎&Fax/0858-23-6095



## 「芸術たのしみ広場」 シンポジウム

### 写真表現の楽しみ



パネラーの福島氏、小矢野氏、林原氏

左より通訳の鈴木氏、ズン・シ・クォン氏

県文連事業芸術たのしみ広場  
シンポジウム  
「写真表現の楽しみ」  
倉文協の恒例事業に成長  
した日韓写真家交流は、今年  
は春川市在住の写真作家「鄭  
時権氏(ズン・シ・クォン)」



シンポジウム 写真表現の楽しみ

を招いてのシンポジウムを、  
開催しました。(詳細は2p、  
6p)シンポジウムは、4人の  
パネリストと共に県内写真作  
家を交えた聴衆と、「写真表現  
の楽しみ」をテーマに意見交  
換を行いました。基調提案は、

### 注目された基調提案!



現代美術の動向を踏まえ、写  
真作家たちが一体何を撮って  
きたのかを考察し、現代に至  
る過程が示されました。そし  
て今の時代は全ての人が、写  
真を芸術として具現できるも  
のだと結論されました。



芸術たのしみ広場 シンポジウム

「写真表現の楽しみ」

令和元年度

「芸術たのしみ広場」報告書

去る10月20日(日)午後1時30分より、倉吉市文化活動センターに於いて、県文連からの委託事業「芸術たのしみ広場」を倉文協が取り組みました。その概要を報告いたします。

○シンポジウム

「写真表現の楽しみ」



当日午後1時30分より、ズン・シ・クオン氏による写真展のギャラリートークがあり、その後、鳥取オペラ協会の協力でミニコンサート(出演/ソプラノの鶴崎千晴氏、ピアノの兼田恵理子による日本歌曲が披露されました。鳥取オペラ協会を代表するソリストであり、高い芸術性を感じさせる演奏となりました。

その後、会場移動し、「芸術たのしみ広場」シンポジウム(写真表現の楽しみ)に入りました。県文連会長『小谷幸久』と担当団体、倉吉文化団体協議会会長の計羽孝之が挨拶し、シンポジウム参加のパネラーが紹介されました。



韓国江原道春川写真家協会会長「ズン・シ・クオン」氏、米子市在住の写真家「福島多暉夫」氏、北栄町在住の写真家「小矢野貢」氏、琴浦町在住の写真家「林原滋」氏の4氏。

シンポジウムのコーディネーターは倉文協会長の計羽孝之が担当しました。



□シンポジウム・スタート

コーディネーターの計羽孝之氏より、シンポジウムの目的について次のように述べた。「韓国江原道写真家協会」の鄭(ズン)時権(シ・クオン)氏をお招きし、倉文協所属の写真作家たち及び県内写真家と、「写真表現の楽しみ」をテーマに意見交換会を行います。写真は現代最先端写真界で、現代美術の範疇で語られています。しかし、アートとしての写真は混沌の中にあり



ます。そこで今回は、写真が誕生して以降、写真家たちは一体何を撮ってきたのか、その潮流を反芻し、現代の「写真は創る時代」の写真表現の楽しみ方を模索してみたいと思います。」とのこと。そして引き続き、基調提案が行われました。

### 「1」基調提案

コーディネーターの計羽孝之氏より、写真の黎明期から、現代に至る写真の歴史を俯瞰した提案が、写真家たちはその時代時代に、社会の要請や時代背景で何をテーマとして撮影して来たのかを、「11の時代」に区分して説明されました。それは①風景写真の時代②旅行写真の時代③芸術的直観力の時代④リアリズムの時代⑤芸術写真の時代⑥リアリズム脱却の時代⑦フォト・ジャーナリズムの時代⑧機械の時代⑨イメージの時代⑩パーソナルの時代⑪写真は創る時代とし、現代写真が混沌の世界に至った軌跡を説明されました。

### 「2」パネラーの自己紹介を兼

ねて、自作世界を語っていただきました。

・ズン・シ・クオン氏は「火花を撮る。」について、撮影のエピソードを交えた技法の紹介。

・福島多暉夫氏は「私の風景写真に求めるもの」について語っていただきました。

・小矢野貢氏は「オーロラを撮る」ためのノウハウを、具体的に語っていただきました。

・林原滋氏は「風景を創る」とし、なんでもない風景を絶景に撮るためのスタンスを語っていただきました。

「3」写真の機能を活かした画像づくりについて、パネラーに語っていただきました。

現代のデジタルカメラは、「白黒写真の時代」の、暗室作業をマスターするのに長い年月が必要であったが、現代ではITが組み込まれたカメラロボットが自動的に処理するため、誰でもが美しい写真が撮れる時代になっていること。撮影機能の進化が、新しい写真の視点を開いて行ったこと。フィルム時代には考え

られなかったような画像が取れること。それらのカメラの機能が進化したため、写真芸術は写真と言うテクニクを使い、何を考え、表現者自身が何を主張し、何を作品として昇華させるかの問題になっているとのことでした。絵画作品(油彩画)においては、基礎技能(デッサンのスキル)がなければ、そもそも絵は描けないが、写真の場合はその基礎技能の部分を全てカメラがやってくれるため、誰がシャッターを押しても、美しい写真は撮れる時代でもある。そのため、単に機械(カメラ)が作り出す画像に「おんぶにだっこ」の写真が氾濫している。

つまり、進化した機能を使った写真だけでは、作品にならないとの事です。では、どうすれば写真が作品として表現できるようになるのかとの問いがあり、その回答として、パネラーに各自の方法論をお聞きました。

「4」写真家の独自表現の世界及び写真でしか出来ない表現について語っていただきました

小矢野貢氏作品



た。

・小矢野氏からは、もともと実用として、伝えるべき農業技術を農家の皆さんに伝達するという目的で動画撮影を始めていた。そのため、云いたいことを如何に伝えるかのテクニクとして、カメラワークを学び、伝達項目の整理(5W1H)をし、それに準じたカット割りを考え、遠景撮影・中間・近景で何を主張するか、のシナリオ作りをして来た。そして、動画表現の時間を圧

縮し、数枚の写真で表現する技法の模索、そして一枚の静止画にすべての主張をまとめ上げる写真の世界に入っていたと話された。

更に、近年取り組んでいるカナダのイエローナイフでの撮影秘話を話して頂き、写真撮影の喜びを示されました。イエローナイフは、まさにオーロラの聖地であり街の明かりが全く届かない場所にあるため、展望が開け、どの方向

林原滋の作品



からオーロラが出現しても美しく見ることが出来るとの事

です。

・林原氏は、風景写真の専門家ですが、誰でもが求める絶景を撮るのではなく、自分の住む町内外の平凡な風景の中に、自分の琴線に触れる風景を見つけ出し、その美しさを強調するための撮影工夫が総てとの事です。その撮影工夫の一端を紹介されましたが、思いもよらないもの(懐中電灯を10種類等)であり、撮影エピソードを聞くとなるほどと得心の行くものでした。例えば、夜陰の中に桜の花だけが白く映っている幻想的な光景も、名所にある夜間照明とは全く異なる美しさを表現できているものです。このような写真は、まず、何を表現したいのかのテーマがあり、その表現を可能にするため何をどうするかの試行活動があり、幾度となく撮影グッツ(懐中電灯+色フィルター)の模索の後に表現したかった画像を作り上げていくとの事です。現像ソフト(フォトショップ)に頼らない撮影姿勢との事です。・福島氏は、写真歴50年以上

福島多暉夫氏の作品



の大ベテランであり、フィルムの白黒時代から、カラー時代、そしてデジタル写真時代の最先端を歩み続けた方であり、写真誕生から180年の流れを熟知した方です。そして、現代の写真技術は、表現力を高めるための道具に過ぎないとのことであり、写真表現をするのは人間であり、機械に振り回されるのではなく、機械を如何に操るかが重要と写真撮影の基本姿勢が示されました。したがって、パソコン上で現像ソフトを使つての

作品作りは常道であり、そのスキルが問われる時代との認識も示されました。という事は、写真は様々なテクニクの習得以前に、芸術表現者としてのリテラシー(様々コミユニケーション、例えば、ポディランゲージ、画像、映像等を適切に読み取り、適切に分析し、適切にその媒体で記述・表現できること)が問われると力説された。つまり、写真作品はシャッターを切つて偶然に生まれるものではないという事であり、リテラシーを得るためには、様々な芸術作品に接したり、大袈裟に言えば自分の人生をどのように生きるか、美しい人生を如何に描くかに関わっているとの事でした。

ともあれ、現代では写真が氾濫している。単にシャッターを押せば写真は出来るが、それは時の記録に過ぎず、思い出を凍結させる記念写真であつたりする。そもそも、写真は全て記録であり、それをどう扱うのかで、芸術の範疇に入つたり、商業媒体になつ



たり、コミュニケーションツールになったりする。写真そのものを楽しむ風土は世界中に氾濫し、新しい社会秩序を構築したりしている。そんな大げさでなくても、個人的に写真を楽しむ方法は沢山ある。「5」**写真を撮る楽しみ**について、パネラーの福島氏がまとめてくださいました。

スマホの普及は、市民のコミュニケーションの最も有力なツールとして普及してしまつた。これまで人間が持つコミュニケーション能力は、過去のどんな時代よりも強力な武器を持つたことになる。スマホのカメラ機能(写真や動画)の進化は、スチールカメラを遥かに追い越し、プロ用カメラの機能に限りなく近づいた時代である。そんな中で、写真を撮つては、写真芸術に近づけようと考えたり、自分の表現などとしなくても、写真は十二分に楽しむことが出来る。現代は、なんでもありの混沌とした時代であり、その全ての楽しみに、全ての人に価値ある楽しみだと思え

る。社会に対して表現活動する場も、ギャラリーでなくても、様々にチャンスとその場が拡大している。インターネッ卜上のギャラリーは大繁盛だし、フェイスブックでは万人に開放された宇宙的空間である。おおいに、写真を楽しまれることを期待していると

の事です。「6」**コーディネート**の計羽氏が、シンポジウムのまとめとして次のように話し、終了した。

私たちは誰に認められようと、認められまいと「芸術家としての生き方をすべき」です。芸術とは哲学の一分野であり、人間が如何に美しく生きるかを模索することが重要なのだ。私たちは毎日の生活の中で、常に人生の選択を強いられ、悩みながら決定し続ける生活をしています。良い選択かどうかの判断よりも、まず選択し続けることが大切であり、そこそが、人生になるのです。ですから人生にプロフェッショナルもアマチュアもないのです。それと同

じように、芸術家に玄人とか素人との線引きは不要なのです。しかし、芸術家としての生き方(より美しい生き方を求める事)をしない人生は、「死に至る病」(キルケゴール)だと言われます。事の大小や様相の異なることは多々あつても、常に拮抗する対抗軸を持つて、二つの対立概念を

より高次の概念によつて、統合する生き方をすべきだと、短絡的に述べ、写真を作品として仕上げるからこそが、「写真を撮る真の喜び」ではないかと結論されました。

当日の参加者は合計 42

名 ミニコンサート25人  
シンポジウム 17人でした。  
○アンケート回答に見る事業実施の成果

「写真はそのままのモノばかりと思つていましたが、そうではないと初めて分かりました。」とのアンケート回答がありました。写真が作品となり、芸術表現が可能な世界があると理解していただけた。そして、基調提案に示された写真に求められてきた歴史的

背景について、初めて知つたと、写真歴50年のベテラン聴衆からのことばで、このシンポジウムを開催した意義があつたと感じました。さらに、写真家たちが色々な思いを持ち写真表現をされていることが理解できたとの意見、「パネラーそれぞれが、異なる姿勢で写真に取り組んでおられるのが、とても参考になりました。『写真とは何か、どう取り組んでいくのか』を考える素晴らしいシンポジウムでした。」とのアンケートコメントが総てを語つていてと思つました。当日のミニコンサート

の開催についても「音楽との組み合わせは良かった。」との評価もいただきました。最後に福島氏が「写真は記録思い出。」正にその通りですね。その写真も素晴らしい。」との言が、写真の楽しみ方を如実に物語っていました。

○課題として

何と言つても参加者の少なさです。広報にはかなり努力はしましたが、写真愛好家ではなく写真作家を対象とした

ため、内容が一般受けしなかったことが、動員数減の原因だと思いました。しかし、写真を撮るだけで「写真作家」然として、写真に自己を反映させられないのに気が付かない愛好家の多さには、このシンポジウムで扱う内容を学んでいただきたいとの思いがつのります。パツと見て、一瞬で面白さが伝わるもの、インパクトがあるものを追いかけてばかりせず、じっくりと見ていくことで様々なことが発見されるものを求めてほしいものです。現代の写真家は、様々な技術を工夫し、それを使って自分にしか撮れないものを追いつめていくのです。テクノロジーの進化と共に写真は進化してきた歴史を知り、時間や記憶を持つ、深い意味を明らかにしたり、新しい物語を描いたり出来るのが現代の写真ではないのでしょうか。今後は、県域写真団体と共催するなどし、必要な人に必要なリテラシー情報を届け続けることの重大さを噛みしめています。

リフレギャラリー

□至福の刻Ⅲ

～思えば遠くへ～

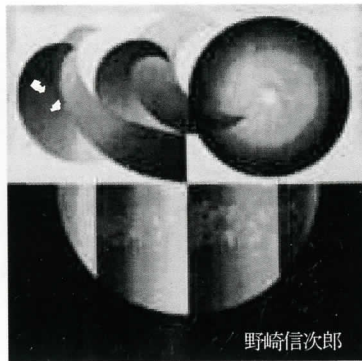
門脇正八写真展

12/15～27

□リフレ企画展

第6回鳥取県の版画家秀作展

2020年1/4～19

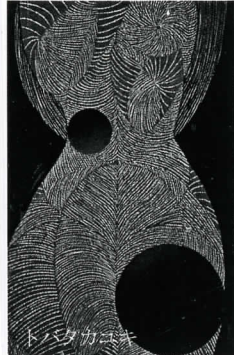


野崎信次郎



三嶋沙織

今回の出品者は、倉吉版画の系譜をたどり、現代までの作家です。その作品を展示いたします。出品作家は次の通り。



トバタカユキ

長谷川富三郎・加納告保・岸信正義・野崎信次郎・田熊誠・綾女知廣・トバタカユキ・坂田秀樹・桑田幸人・近藤正徳・伊東寛敏・中原玉美・三嶋沙織の13氏の皆さんです。  
ギャラリーコンサート

1/4 18時

中野隆尺八

新年パーティーあり

□リフレ企画展

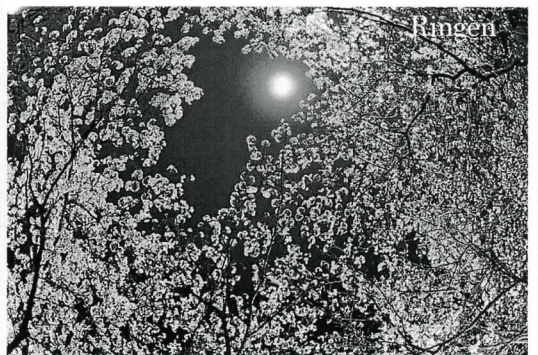
小矢野真写真展

イエローナイフ

オーロラの旅

～宇宙からの贈り物～

1/21～30



Ringen

ギャラリーコンサート

1/21 18時

稲毛麻紀&フレンズ

□リフレ企画展

第6回倉吉市の写真家秀作展

2/1～14

□全日本写真連盟

鳥取県本部写真展

2/15～28

ギャラリーコンサート

2/15 18時

加藤文女ピアノ

△リフレギャラリーのお問い合わせ↓TEL(23)6095



# アザレア音楽祭2020スケジュール

## アザレア旬間

5/10 (日) 14:00~ オープニング【アザレア室内合奏団】・コンサート&開会式典  
倉吉未来中心大ホール於

- 第1部 ①山本喜三 弦楽合奏のための「アザレアの歌」  
②チャイコフスキー 弦楽セレナーデ
- 第2部 ③モーツァルト フルートとハープのための協奏曲 (稲田真司 Fl、松村多嘉代 Hp)  
④モーツァルト ホルン協奏曲第4番変ホ長調 K. 495 (Hr 小椋順二)
- 5/12 (火) 19:30~ 【光長真理恵ソプラノ・コンサート・ファイナル】 倉吉交流プラザ  
5/16 (土) 14:00~ 【鶴崎千晴メゾソプラノ・コンサート】 倉吉交流プラザ  
5/17 (日) 11:00~ 【パープルタウンコンサート (吹奏楽と民踊)】 パープルタウン広場  
倉吉民踊の会(倉吉市)・民踊きくの会(鳥取市)
- 5/17 (日) 14:00~ 【秋山ちひろピアノ・コンサート】 倉吉交流プラザ  
5/19 (火) 19:30~ 【小椋美香子ソプラノ・コンサート】 倉吉交流プラザ

## スミ旬間

- 5/23 (土) 14:00~ 【松田千絵ソプラノ・コンサート】 倉吉交流プラザ  
5/24 (日) 14:00~ 【木村恵理ファゴット・コンサート】 倉吉交流プラザ  
5/24 (日) 18:30~ 【打吹音楽倶楽部ブレーメン・コンサート】 自主公演 ビーワイヨシダ3F  
5/27 (水) 19:30~ 【小椋順二ホルン・コンサート】 倉吉交流プラザ  
5/29 (金) 19:30~ 【杉山清香クラリネット・コンサート】 倉吉交流プラザ  
5/30 (土) 14:00~ 【中原美幸ソプラノ・コンサート】 倉吉交流プラザ

## バラ旬間

- 5/31 (日) 【ミニリサイタルリレー・コンサート】 倉吉交流プラザ  
11:00~ 加藤文女ピアノミニリサイタル 14:00~ 田中加菜ピアノミニリサイタル
- 6/2 (火) 19:30~ 【時本さなえヴァイオリン・コンサート】 倉吉シティホテルチャペル  
6/4 (木) 19:30~ 【松江隆司テナー・コンサート】 倉吉交流プラザ  
6/5 (金) 19:30~ 【中野隆尺八コンサート】 倉吉交流プラザ  
6/6 (土) 19:30~ 【アザレア弦楽四重奏団コンサート】 倉吉博物館玄関ホール  
6/7 (日) 14:00~ 【寺内智子ソプラノ・コンサート】 倉吉交流プラザ

## ライラック週間

- 6/9 (火) 19:30~ 【西岡千秋バリトン・コンサート】 倉吉交流プラザ  
6/11 (木) 19:30~ 【重利和徳ピアノ・コンサート】 倉吉交流プラザ  
6/13 (土) 14:00~ 【佐々木まゆみソプラノ・コンサート】 倉吉交流プラザ

## アジサイ週間

- 6/14 (日) 14:00~ 【山城裕子ピアノ・コンサート】 倉吉交流プラザ  
6/18 (木) 19:30~ 【綿口裕美子ピアノ・コンサート】 倉吉交流プラザ  
6/20 (土) 19:30~ 【Xiksa 辺見康孝 Vn&松村多嘉代 Hp・コンサート】 倉吉博物館玄関ホール  
6/21 (日) 14:00~ 【ファイナル・コンサート】 倉吉未来中心大ホール  
+ 「吉田章一バリトン・コンサート」  
合唱団わかば/コールウィンドミル/コーラスはわい/成徳小学校合唱団/  
三朝コールげんげ/混声合唱団みお/明倫小学校合唱団/赤崎女声コーラス  
「まどか」/合唱団こさじ/倉吉女声合唱団/ザ・ラニアルコーラス



第130

フロリダで民泊

ニューヨークから夫の親戚たちが休暇でフロリダに来た。夫の弟夫婦、夫のいとこたち、いとこの友達たちで、全部で6人。彼らは Airbnb (エアビーアンドビー) というウェブサイトで予約する民泊システムをつかって隣町の一軒家をレンタル。夫と私、それから近くに住む夫の娘夫婦が招待されて遊びに行った。それで総勢10人のうち3人が偶然にも10月終わり頃の誕生日なので合同でバースデーパーティーを開いた。

5 寝室、バス・トイレが3つ、キッチン、食堂、リビングルーム、大きなテーブルが置ける広いパティオ、プール、屋外ジャクージ (日本でいうジャグジー)。リビングルーム

には電気式のデジタル暖炉があった。フロリダはハワイのように常夏なので暖炉のある家は少ない。だが暖炉の火を見ると人間はリラクセスするので暖炉に一定の人氣がある。ニューヨークのような寒冷な州の郊外では暖炉がある家が多い。しかしフロリダでは暖炉はあるとしても熱くならないデジタル暖炉なのだ。



民泊の値段を聞いたら一泊3百ドルだと言っていた。私たち夫婦はエアビーアンドビーを使ったことはないのによく知らなかったが、彼らは何度も使ったことがあるそうで

特に大人数で行く時は一軒家を借りると広いし、人数で割るとホテルよりずっと安上がりでよいと言っていた。オーナーは遠くに住んでいるようで、この家の近くに管理人を雇っている。彼らが到着した時にその管理人がこの家で待っていて、部屋の案内や備品の使い方などの説明をし、鍵を渡してくれたそう。

私たちはフロリダに住んでいるので10月末になって真夏の猛暑がようやく去り、まともな夏の気温になってほっとしていた。しかしニューヨークの10月末はもう寒い。家には集中暖房がすでに入っている。紅葉のピークでとても美しい時期だ。ニューヨークから来た彼らにとっては、フロリダはビーチやプールを楽しむ所だ。



彼らはその民泊に着いた初日の午後から庭のプールで楽しみ、近くのビーチにも行ったそう。初日夜の写真を見せてもらったが、庭のプールは夜にはライティングがされていてプールの水が紫や緑や紺色に輝いてきれい。

パーティーは午後3時頃始まって、庭のプールで泳いだり、プールサイドでしばらくおしゃべりをしたり、アペタイザーや飲み物を楽しんだ後に、バーベキューが始まった。ハンバーガーとホットドッグを焼く。フロリダ州は湿地帯が多いのでガスラインが来ておらず、どこの家もオール電化だ。庭のバーベキューグリルはプロパンガス式だ。

他の食べ物にはコールスロー (キャベツの千切りをマヨネーズであえたサラダ)、煮豆 (日本の金時豆の小さいのと似ている)、それから私たちが持って行ったポテトサラダ、民泊のオーナーがくれたフルーツ (パイナップル、リンゴ、バナナ、オレングジ)、そしてバースデー・ケーキ。



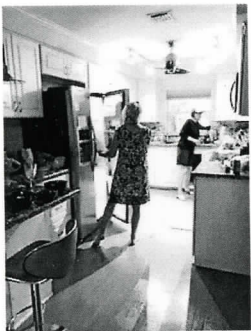


翌日は、彼らは、パームビーチのダック・ツアーと呼ばれる観光に行った。これは水陸両用のバスでもありボートでもある乗り物に乗って、パームビーチの街を走り、それから海岸から海に入って、オーシャンフロントに建ち並ぶ高級別荘、豪華なホテル、ヨットなどを眺めるといふものだ。ツアーガイドがユーモアたっぷりに観光ポイントを説明してくれる。ダック・ツアーのダックはアヒルという意味で、アヒルは陸も歩けるし、水上も泳いで進める。

話がそれるが、この水陸両



用の乗り物は洪水の時に威力を発揮する。つい最近、日本で大きな水害が連発した。こういう時にこの乗り物があれば多くの人を素早く助け出せる。特殊車両なので多分高額で、水害救助目的で各自自治体がこの乗り物を保有することは困難だろうが。



ダック・ツアーの後、夫の

弟夫婦といふ私たちは、夫と私が住む家に遊びに来た。米国では客を応接間に通すだけでなく、全部の部屋を案内して客に見せるのが普通だ。新築の家を買ったのでそんなに掃除を気にしなくてもよいので助かる。お茶だけして、その後クラブハウスを案内しに行った。うちはゲイティッド・コミュニティと呼ばれる塀で囲まれた地域に6百軒位ある家の中のひとつで、ゲイティッド・コミュニティには、クラブハウスと呼ばれる施設が中央にある。

カフェ、プール、テニスコート、ジム、ヨガやピラテスなどのフィットネス・クラスをやるフロア、ビリヤードの部屋、カードゲームの部屋、ステージのある大きなホール、イベント用のキッチン、事務所などがある。そこを一つ一つ案内して、最後にジムのフロアの大きな鏡の前に並んでみんなと一緒に記念写真を撮った。楽しい週末だった。

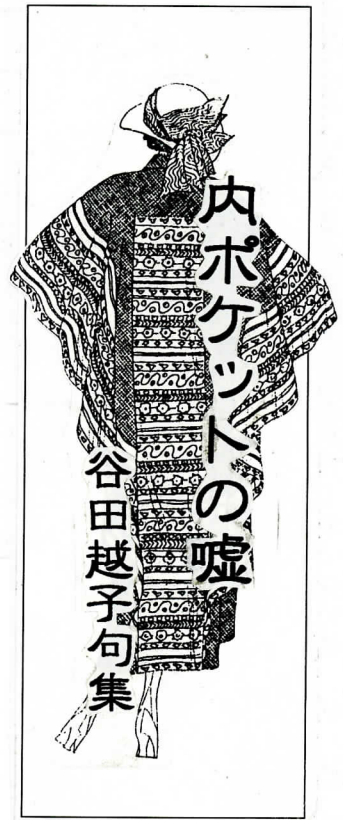


# 窓



映画「蜜蜂と遠雷」を見た。

音楽を形にして見せるという事が、こんなにも易々と可能になるのかと言えほど巧く映像化していた。この映画のテーマは音楽そのものについてであり、映画を見る者たちに音楽それ自体を感じさせるものとなっていたと感じた。「この世界には音楽が満ちている。ある種世界そのものが音楽を奏でている。自然から溢れる音の粒、流れでる音の旋律。それを譜面におこし世界を表現する。それを演奏することで世界に関わる。音楽を通して世界とのつながりを感じる事ができる。」音楽の持つ神秘とも言えるものを失いつつある現代に、クラシカル音楽の生きる耀きを取り戻してくれる様々な可能性を見つけてくれるかもと感じ、胸が熱くなった。



第14回

昔の映画館

朝を独占する光の視野から幸せ生れる

何にでも値段付けたがる男の自分の値段

空の戸棚にしまいこんだ私だけの夏雲

茄子を洗うと夏の音がし風が立ち止まる

無口な空が空へ殺到し夕焼けになる

埋もらない私の人生の薄い原稿用紙

その言葉あたたため今日は良い日でした

暫く夜と朝の間に隠れていた秘密

心の谷間が汗ばんでくる考えるのやめた

蝉も私も焦っている残りの時間

太陽が手招きする初夏の口紅銀色にする

飛び出しそうな目玉の奥に昔の人がいた

男は答えず女の疑問符は消されてしまう

この胸の軋みそつと押さえ月に手を振る

夜更けを近づいてきた月までの距離

蕾の開き始める幽かな匂いが秋になる

ギザギザな胸の途切れに言葉を繋ぐ

出会いも別れもなく夏が終わりに近づく

空へジョギングしていく風の朝のかたち

無口な胸の哀しい模様を色を塗る

もう忘れたと言う決して忘れてない事

一杯のコーヒー飲んでさあ働こう

なだらかな一日の乱れてみたい風に坐る

庭の落ち葉掃いて今日の心もたたんでおく

考え事に折り目つけて明日に仕舞う

淡々と流れる日に途絶えていくもの

淋しさのしずくが降る秋の片隅にいる

迂回して落葉になった女の年月





←「三つの割菊」米山紀子

→「輝きのサークル」吉村梅香



# キルト 2019年度



「思い出」坂田清恵



「SPECIAL KASUMI」中嶋香澄



「サンクチュアリー」宇田川喜美子







今月の執筆者

佐藤栄里子

同じ体験で共感できた

♪新しい朝が来た 希望の朝だ・・・と聴き、思い起こす夏の朝。この曲が流れば、口ずさめる人も多いのではないのでしょうか。ところが、この歌を「なぜみんなが知っているのか？」と不思議がる人がいました。その人は、耳が聞こえない人でした。

考えてみれば、ラジオは音声のみの情報です。聞こえる人たちが毎日のように聴き、当たり前のように覚えらるる歌を、聞こえなければ知ることとはできません。ヒット曲や話題のCM、流行語なども同

様でしょう。「ラジオ体操の歌」の一件は、はっとさせられる出来事でした。

私たちは「要約筆記グループ まるよ」というサークルで、要約筆記に関するボランティアを行っています。最近では、特に県のイベントなどで目にする機会も増えてきた要約筆記。聞こえない・聞こえにくい人々に対し、音声情報をその場で文字に置き換え、

情報を保障するものです。以前はボランティアで担っていましたが、今では公的な福祉事業となっています。音声は書くのに比べ、ものすごい速さで流れ去ってしまいます。

当初、手書きのみだった要約筆記(今はパソコンも)では、そのスピードに追いつく工夫として、略語や略号が考えられました。サークル名の「まるよ」は、「要約筆記」を表す略号が〇で囲んだ「ヨ」であることから命名されたものです。近年のサークル活動では、人形劇や民話の語り等を、字幕付きで上演するイベントなどを行っています。

ところで、筑波大学准教授

の落合陽一氏と日本ファイルによる「耳で聴かない音楽会」プロジェクトというものを、

最近知りました。テクノロジーを活用した聴覚支援システムで、音の特徴を振動や光に変え、身体で音楽を楽しもうとするコンサートです。音楽から享受できるもの。それを聞こえに関わらず共有できるのだとしたら、と考えると嬉しくなります。

私たちの活動はもちろん、このプロジェクトの比ではありません。が、聞こえの垣根を超えて、同じものを見て共感しあえたら、と考える点は共通すると思っています。そのために行えることは・・・？

思いとは裏腹に、少ないメンバーそれぞれ事情もあり、活動を同じ「太さ」で継続することは難しいと感じます。これまで、立ち上げから会を維持されてきた方々の力に敬意を感じつつ、「できるだけ」を続けていこうとしているところです。そして毎月、リフレプラザでの例会へと、足を運びます。最近はおもっぱら、12月に開催予定のイベント

の準備中。今後、案内を目にされた方はぜひ、会場を覗いてみて下さい。

(要約筆記グループ まるよ)

編集後記

季節の変わり目には、毎回体に変調をきたすが、これまでは挨拶みたいなものだったところが、この秋から冬にかけての季節の変わり目に、ひどい風邪を引いてしまった。

まさに鬼の霍乱と言うべきか、体全体は痛さでもがき、頭は朦朧とし、「揮霍撩乱」の様相呈した。突然現れた夏日の外出で暑気あたり、夕刻の冷え込みで体調を崩したのだ。激しい吐き気を催す急性の病が4日間も続いた。いつもは元気で、殺されても死なないなどと豪語していたが、今回は珍しく気弱になった。突然やつてくる急性の痛みは、心持ちまで蝕んでいくような苦しみを味わった。年老いていくという事は、こうして徐々に生気を失うものなのかもしれない。伴侶がそばで見守っているだけで、妙な安心感と回復の兆しが見えてきたりする。